

No. 278
歴史

だいにほんさいけんどうちゅうき 大日本細見道中記（熊本市米村家資料）

江戸時代に入ると、街道の整備が進んだことや、沿線の宿場が発達したこともあって寺社参詣などの旅が盛んに行われるようになります。当時の旅は徒歩による移動が主であり、旅人にとっては旅程を確認する必要から、街道全体についての旅行案内書、すなわち道中記が必要とされるようになりました。また寺社参拝を名目とした観光的な旅行の場合は、目的地だけでなく途中の名所旧跡にも立ち寄ることから、ガイドブックとしても道中記に需要がありました。道中記は既に明暦元年（1655）頃には出現していたようですが、広く一般に普及するようになるのは江戸時代後期のことで、とりわけ浪花講をはじめとする講の成立の影響が大きいようです。ここでいう講とは今でいう旅館組合のことで、文化元年（1804）の浪花講の設立をはじめとして江戸時代後期から幕末にかけて全国に設立され、優良な旅籠を定宿に指定し、旅行者に安全・安心な宿を提供することを目的としていました。



図 道中記本文

本資料は嘉永4年（1851）に刊行された道中記で、浪花講・東国組・仲吉講・関東講が合同で出版したものです。巻頭には大坂を起点とする東海道の彩色図が掲載され、名所が説明文を添えて絵で紹介されています。本文は街道別となっており、宿場や名所が欄を区切って順番に列記され、町ごとに講が指定する旅籠の名前が1～2店舗記されています。写真の部分は「山家^{ヨリ}肥後國熊本道」と記された箇所です。山家（福岡県筑紫野市）から熊本へ向かい、さらに高橋（熊本県熊本市）を経由して島原へ渡り、長崎へ至る街道の宿場が列記されていて、南関の「かどや」、植木の「門松や」、熊本の「網干や」などが講の指定旅籠として記されています。

幕末には多くの講が設立され、それぞれ道中記を出版して講に加入した旅人に一種の会員証として配布したことで道中記は広く普及しますが、やがて明治時代を迎え鉄道が登場すると、道中記はその役目を終えて姿を消しました。（古澤 広大）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695
TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302
E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp
HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

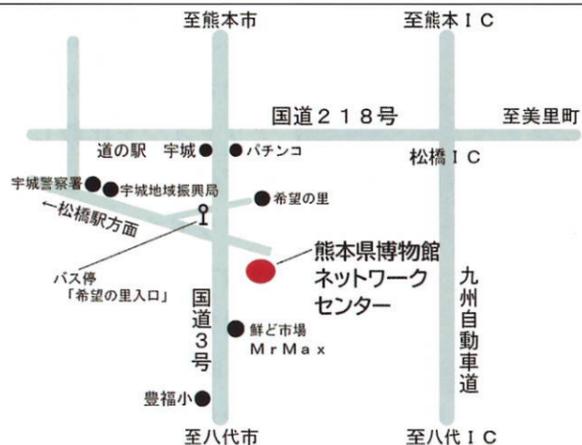
〔公共交通機関〕

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由
八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約3km



熊本県博物館ネットワークセンターだより

熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2022年10月25日



No. 53

イベント情報（令和4年11月～令和5年2月）

企画展 会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第3回企画展

「熊本の動物と法－天然記念物・希少野生動植物・特定外来生物」

熊本県に生息する天然記念物や特定外来生物などの動物を、関連する法律とともに紹介します。

○開催期間 令和4年10月18日（火）
～12月18日（日）



カモシカ

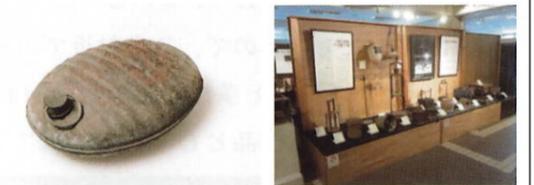
ブルーギル

第4回企画展

「ちょっと昔の暮らし探検」

小学校3年生の社会科で学ぶ道具を中心に、懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を紹介します。

○開催期間 令和5年1月4日（水）
～3月5日（日）



湯たんぼ

昨年度の展示風景

くまもとキッズミュージアム in 宇城

○開催日 令和5年1月21日（土）、22日（日）

○時間 午前10時～午後4時10分

○場所 熊本県博物館ネットワークセンター

県内の博物館や資料館が集まって、子どもたちが自然や伝統文化を学ぶ体験学習を行います。化石レプリカ作り、古銭レプリカ作り、草木染め、貝殻クラフトなど、さまざまなプログラムを予定しています。参加申込制です。詳細は、案内チラシまたは、熊本県博物館ネットワークセンターのホームページなどでお知らせします。



フィールドミュージアムに飛びだそう！

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
落ち葉図鑑を作ろう	津奈木町 舞鶴城公園	11月19日（土） 10:00～12:00	20名	落ち葉を集めて世界に一つの落ち葉図鑑を作ります。	10月10日～ 11月4日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：熊本県・市町村共同システム「電子申請サービス」または、往復はがきに参加者全員の住所、氏名、年齢、電話番号、参加希望プログラム名をご記入の上、申し込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。右側のQRコードからも申し込みができます。（往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。）



記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

No. 274
地学

菱マンガン鉱 Rhodochrosite

マンガン鉱床から産するマンガン鉱物には博物館ネットワークセンターだより 43号で紹介したバラ輝石 (No.224) がありますが、この菱マンガン鉱もよく見られる鉱物です。2つの鉱物は、一見よく似ています。しかし、菱マンガン鉱は硬度 3.5~4 バラ輝石は硬度 5.5~6.5 と硬度が大きく異なる、菱マンガン鉱の劈開が3方向で菱面体を作る、菱マンガン鉱は熱した希塩酸で発泡して溶ける、という違いがあります。

図1の標本は、玉名郡玉東町にある木葉山の東方で採取した菱マンガン鉱です。ルーペで見ると微細結晶が集まっているのが確認できます。写真の面はピンク色をしていますが、全体はこげ茶色をしています。野外にある菱マンガン鉱は表面が酸化して黒く変色するので、この標本も表面が酸化しているものと思われる。

菱マンガン鉱は、マンガンが多く含む鉱物なので、乾電池の材料となる二酸化マンガンの主要原料です。かつては木葉山の東方でマンガン鉱石の採取が行われており、この標本はその頃に採取したものです。現在、鉱山は閉山しているため、この付近での菱マンガン鉱の採取は困難です。菱マンガン鉱は濃い紅色から白色、灰色や淡褐色と多様な色のものがありますが、濃い紅色からピンク色の美しいものは“インカローズ”と呼ばれ、装飾品として利用されています。(廣田 志乃)



図1 菱マンガン鉱
(玉名郡玉東町木葉産)



図2 菱マンガン鉱の結晶
(アメリカ合衆国コロラド州産)

No. 275
民俗

押切

押切は牛馬の飼料となる稲藁や干し草を刻む道具です。県内ではワラキリ、ハミキリとも呼ばれます。ハミとは牛馬の餌のことです。農業機械が普及するまで農作業において牛馬はなくてはならず、多くの農家で飼育されていました。細長い草はそのままでは牛馬が食べにくいので、1~2寸(3~6cm)くらいに刻んで与えていました。

図1の押切は、木の台に大きな包丁の先端を固定したもので、握り柄を上下させて下に置いた藁や草を刻みます。槌子の原理で少ない力で切断できました。

図2の押切は県内では改良ワラキリや機械ハミキリなどと呼ばれ、昭和初期頃から出回りました。包丁の柄を上下することで歯車が回り、箱にセットした藁を適当な長さに押し出す仕組みになっています。従来の押切よりも安全に短時間で大量の草を切ることができるので、特に多頭飼育の家で重宝されました。

押切は飼料用の草を刻む以外に、タケノコの根切りやゴボウの長さ揃えなど様々な農作物の裁断や、壁土に混ぜる藁の裁断などにも使われ、その用途の広さから農家の必需品とされていました。(迫田 久美子)



図1 使用地：松島町(現上天草市)
昭和初期～



図2 使用地：矢部町(現上益城郡山都町)
昭和18年~30年

No. 276
動物

ゴマシジミ *Phengaris teleius* (シジミチョウ科)

ゴマシジミ(図1・2)は、国内では北海道、本州、九州に分布している大型のシジミチョウの一種で、阿蘇地域が分布の南限となっており、熊本県では「熊本県野生動植物の多様性の保全に関する条例」における指定希少野生動植物として、捕獲等が禁止されています。

本種の生態はとても変わっていて、卵から孵化した幼虫はまずワレモコウ類(バラ科)の花穂を食べて育ち、4齢(終齢)幼虫になるとクシケアリ類の巣に運ばれ、アリに甘い蜜を与える代わりにアリの幼虫や蛹を食べて育ちます。このとき、餌として利用できるアリはクシケアリ類の中でも特定の種に決まっていますが、調査やアリの分類が進んでいないこともあり、まだよく分かっていません。ただ、この特異な生態が本種の保全を一層困難なものにしているのは間違いのないでしょう。

図1の標本は条例制定前の1991年に、阿蘇郡久木野村(現南阿蘇村)で採集されたものです。2016年に熊本地震によって触角が欠損してしまいましたが、この可憐で不思議なチョウの姿と、そのチョウを育てる阿蘇の草原の豊かさを伝える貴重な資料となっています。(中蘭 洋行)



図1 ゴマシジミ標本(久木野村産)



図2 ワレモコウの蕾(つぼみ)に産卵するメス(阿蘇郡高森町)

No. 277
植物

アリドオシ *Damnacanthus indicus* (アカネ科)

林内を歩くと、ひざ下くらいの高さで、1cm前後の小さな濃い緑色の葉をつけた植物に出会うことがあります。小さいので草か若木かと勘違いそうですが、成長しても60cm程度にしかならない常緑低木、つまり木です。

春には、小さいながらも真っ白で細長い漏斗型の花が、枝先に2つずつ付きます(図1)。その後実る果実は、これまた小さくて直径5mm程度の球形で、真っ赤に熟してよく目立ちます(図2)。この花や果実に魅せられて思わず手を伸ばすと痛い目に合います。2枚ずつ対になった葉の間に、細くて長く、鋭いトゲがついています(図1)。この植物の和名はアリドオシです。トゲがあまりに鋭く、小さなアリスにえさき通してしまいそう、という意味なのでしょう。このトゲは、シカなどによる被食に対する防御機構だと考えられています。シカがいる地域といない地域の間でたくさんのアリドオシを比較して、シカがいる地域では、トゲが太く、トゲの密度が増していたという研究もあります。

アリドオシは、トゲだけでなく、葉など他の部分にも多くの変異がみられる植物です。図3の標本は、1929年に天草で採集された標本で、アリドオシの多様な変異の一つを保存していると考えられます。同じ植物であっても、時代や場所を変えて標本を蓄積していることは、植物が持つ生物多様性を記録していくことにつながります。(前田 哲弥)



図1 アリドオシの花とトゲ

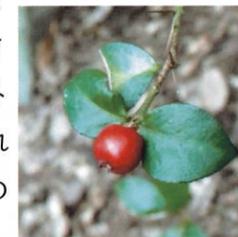


図2 アリドオシの果実



図3 アリドオシの標本